

平成 23 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」
P 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

() 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14,437 人 (287 校)	14,428 人 (287 校)	
中学校 2 年	13,651 人 (137 校)	13,470 人 (136 校)	13,571 人 (136 校)

(参考：全県 小学校 20,525 人, 382 校, 中学校 20,659 人, 187 校)

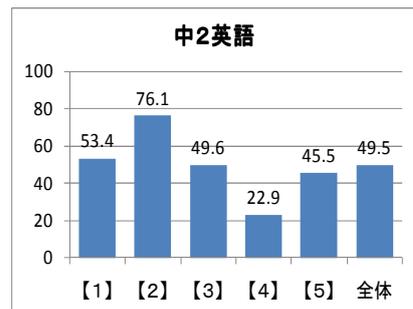
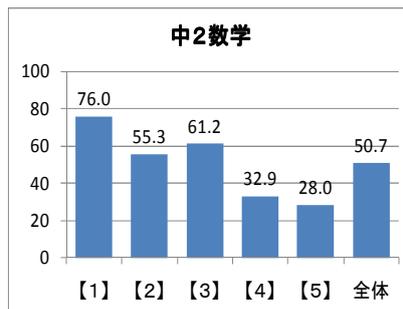
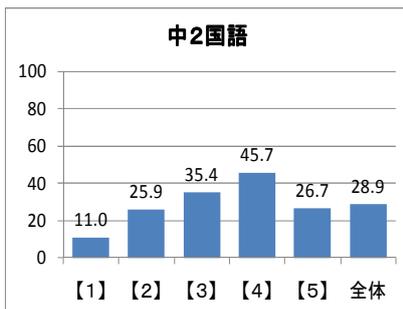
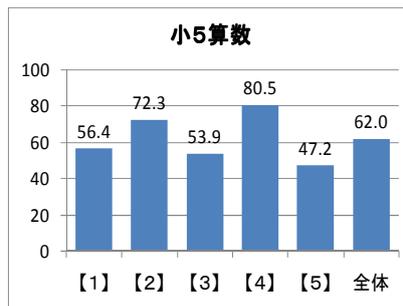
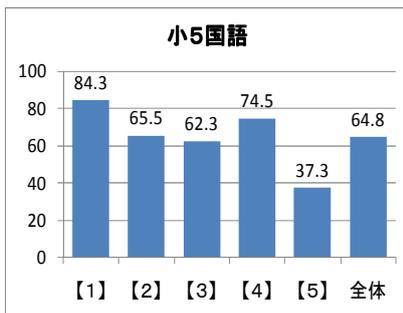
過去の参加状況

		国語	算数・数学	英語
平成 21 年度 P 調査	小学校 5 年	11,223 人 (220 校)	11,383 人 (221 校)	
	中学校 2 年	8,780 人 (95 校)	8,763 人 (95 校)	8,799 人 (96 校)
平成 22 年度 P 調査	小学校 5 年	14,047 人 (273 校)	14,041 人 (273 校)	
	中学校 2 年	11,245 人 (116 校)	11,227 人 (116 校)	11,356 人 (117 校)

2 各問の正答率

(単位%)

問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	全体
小学校 5 年	国語	84.3	65.5	62.3	74.5	37.3	64.8
	算数	56.4	72.3	53.9	80.5	47.2	62.0
中学校 2 年	国語	11.0	25.9	35.4	45.7	26.7	28.9
	数学	76.0	55.3	61.2	32.9	28.0	50.7
	英語	53.4	76.1	49.6	22.9	45.5	49.5



(1) 過去の同一問題について
 < 小学校 5 年算数【1】 >

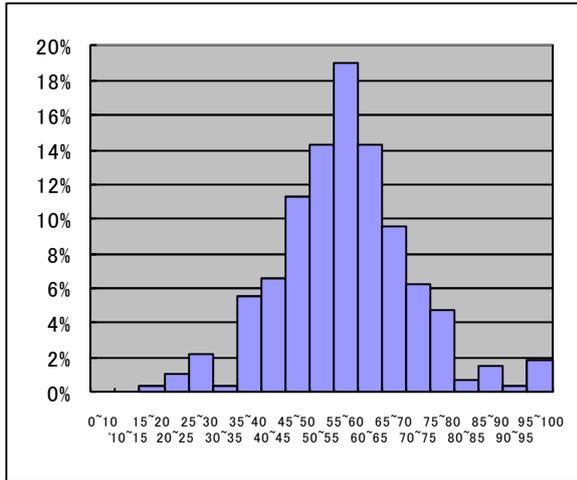
1. $4 + 3$ を計算しなさい。

○ 正答率の経年変化

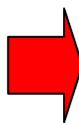
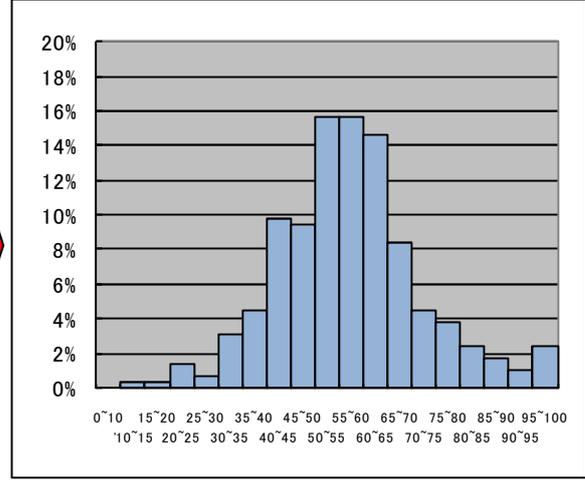
昨年度 (H 2 2) 5 6. 9% → 本年度 (H 2 3) 5 6. 4%

○ 学校ごとの正答率の分布 (縦軸は学校数の相対度数, 横軸は正答率)

昨年度 (H 2 2)



本年度 (H 2 3)



昨年度とほぼ同様の分布となった。学校による正答率のばらつきが大きく、正答率の低かった学校では、位をそろえて計算することの理解を一層定着させたい。

< 中学校 2 年数学【2】 >

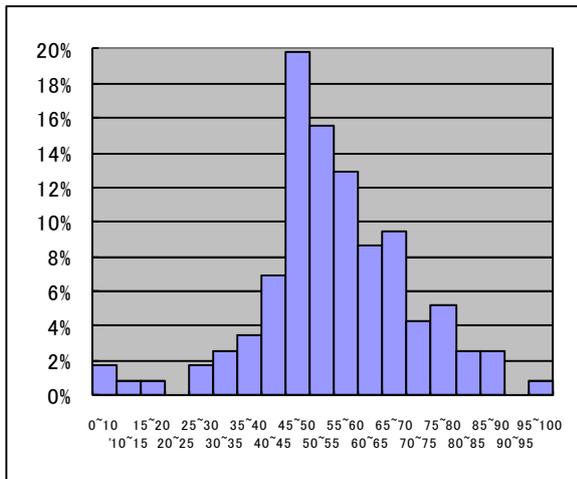
比例の関係 $y = -2x$ のグラフをかきなさい。

○ 正答率の経年変化

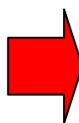
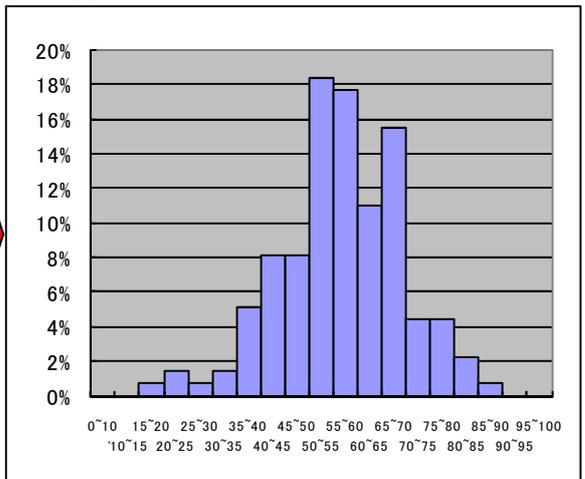
昨年度 (H 2 2) 5 4. 6% → 本年度 (H 2 3) 5 5. 3%

○ 学校ごとの正答率の分布 (縦軸は学校数の相対度数, 横軸は正答率)

昨年度 (H 2 2)



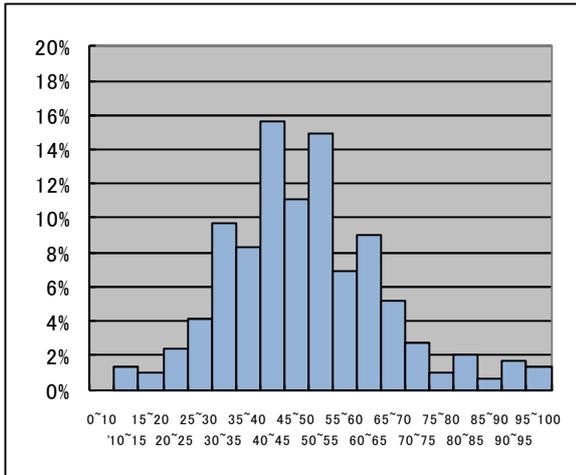
本年度 (H 2 3)



昨年度と比較して、正答率 20%未満の学校が減り、50%以上の学校が増えた。さらに、65~70%の学校が増えている。更に確実な定着を図っていききたい。

(2) 学校による正答率の分布に特徴がある問題について (学校ごとの正答率の分布より)

< 小学校 5年算数【5】 > 正答率 47.2%

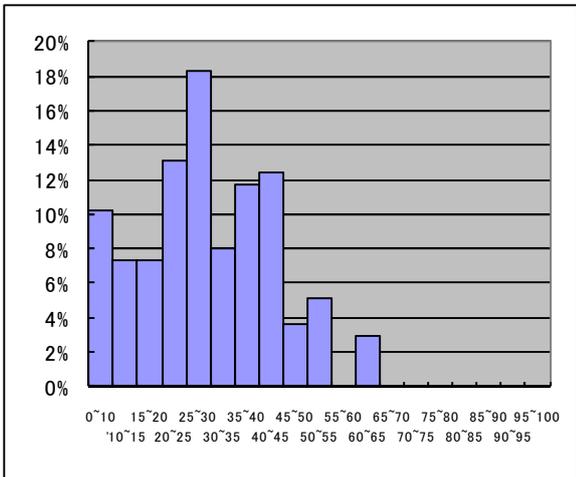


「 $4 \times 4 + 3 \times 3$ の式の説明を、別の囲み方で説明しなさい」

学校ごとの正答率が 10%台~100%まで広い範囲でちらばっている。式の意味を図や言葉で説明することの定着に、学校による差が見られる。

数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動を、より一層位置づけていく必要がある。

< 中学校 2年国語【5】 > 正答率 26.7%

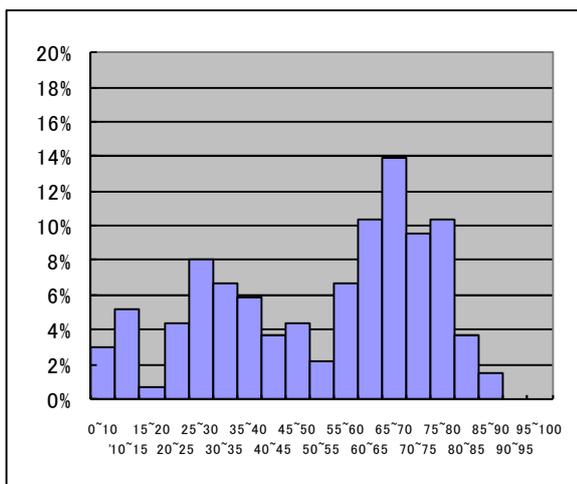


『取材メモA→取材メモB→まとめ』とつながるために、□に入れるべき取材メモを選び、その選んだ理由を記述する」

学校ごとの正答率が 0~65%の範囲でちらばっており、多くの階級の割合が、ほぼ 10%前後となっている。目的に応じて、いくつかの資料を対応させて読んだり、主張と関連付けて材料を選んだりする力や、事実や根拠から理由づける力に、学校による差が見られる。

表現の仕方について、根拠を基に自分の考えをまとめ、交流する学習を大切にしていきたい。

< 中学校 2年英語【1】 > 正答率 53.4%



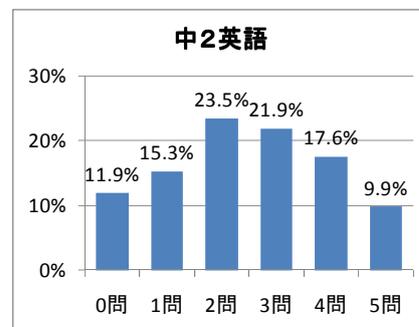
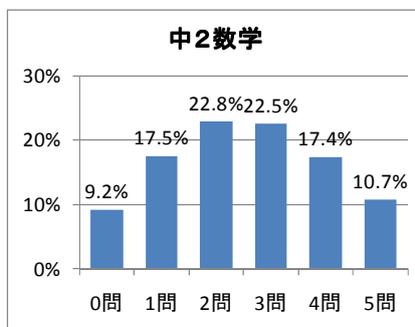
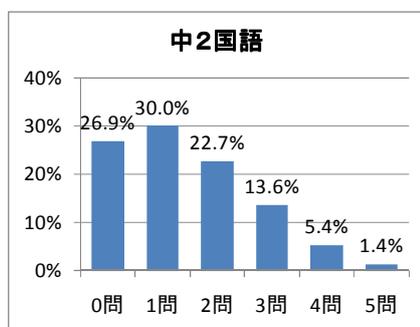
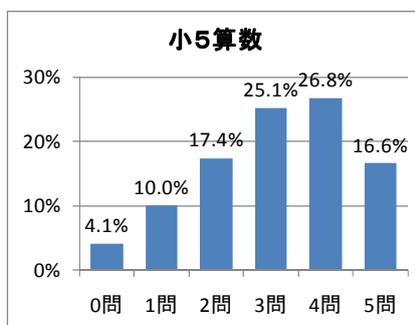
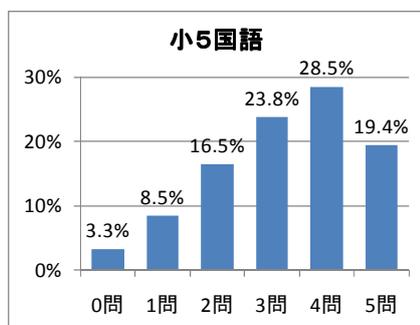
He is (help) her.
下線部の () 内の語を、最も適切な形になおして、1語で書きなさい。

学校ごとの正答率が 0~90%の範囲でちらばっており、その中で 25~30%と 65~70%をそれぞれ頂とする 2こぶ状態になっている。正答率が 25~30%を中心に、現在進行形の理解を図る指導を一層丁寧に行うと共に、十分な口頭練習と「主語+動詞」に着目させて書く活動を大切にしていきたい。

3 正答数の分布

(単位%)

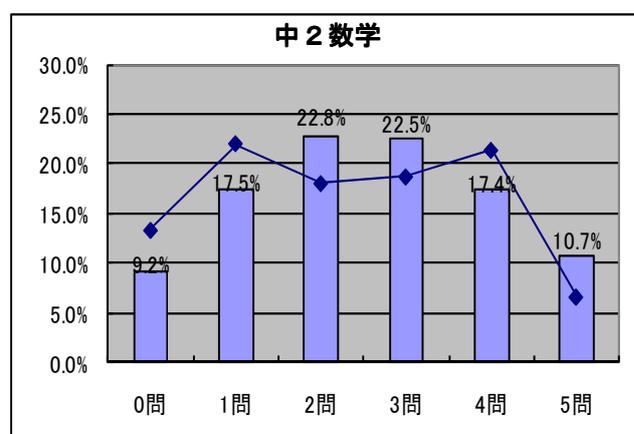
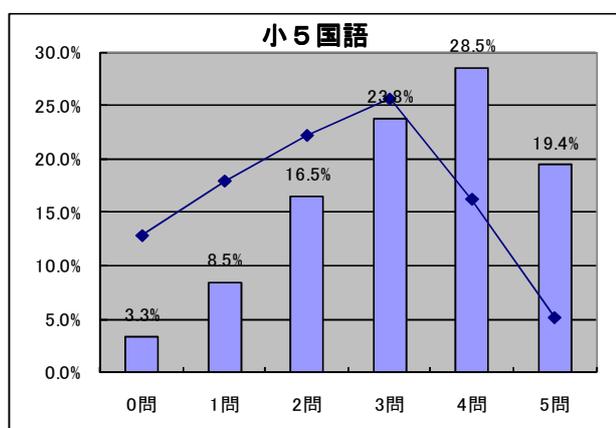
正解数		0問	1問正解	2問正解	3問正解	4問正解	全問正解
小学校 5年	国語	3.3	8.5	16.5	23.8	28.5	19.4
	算数	4.1	10.0	17.4	25.1	26.8	16.6
中学校 2年	国語	26.9	30.0	22.7	13.6	5.4	1.4
	数学	9.2	17.5	22.8	22.5	17.4	10.7
	英語	11.9	15.3	23.5	21.9	17.6	9.9



小学校では、国語、算数ともに右よりの分布となった。中学校では、国語が左よりの分布、数学と英語では、ほぼ左右対称の分布となった。国語では、漢字の読み書きの正答率が低いことが分布に影響していると考えられる。

各校では、この分布と自校の分布を比較することにより、課題を見だし、対応策を立てることができる。

<例> 棒グラフが県平均、折れ線グラフが自校の分布



このように、県平均と比較して、正答数の分布の山が全体的に左寄りの傾向がある学校は、それぞれの個に対する指導をより一層丁寧に行っていきたい。

このように、正答数の分布がM字型の傾向がある学校は、特に、正答数の少ない子どもの誤答分析を基にした指導の工夫を充実させたい。

◆各教科の正答率及び正答数に対する分析◆

(過去の正答率や指導の具体については、解説・指導シートを参照)

【国語】<小学校5年>

1 各問の正答率について

- ・【1】、【2】は、日常生活で使用頻度が高かったり、使用範囲が広がったりすることが予想される漢字を出題した。指導改善の取組について成果が見られるが、引き続き次の2点に留意した指導を継続したい。

◇教室の言語環境に気を配り、**学習した漢字を日常生活の中で意識して使う**ようにすること。

◇練習帳の空欄に繰り返し書かせる宿題だけでなく、「意味を書かせる」「熟語を集めさせる」「短文を作らせる」など、**多様な宿題の出し方を工夫**すること。

- ・【3】は、二文を一文に書き直す問題であるが、正答率は62.3%で、昨年度よりも下回っている。接続語の働きや文と文との関係をとらえ、文を書き直すことに課題がある。接続語の種類と働きを確認し、文と文がどんな関係になっているかを学習する機会を大切にしたい。
- ・【4】は、文章の内容を的確に読むことができるかどうかをみる問題であるが、正答率は74.5%で、昨年度を36.8ポイント上回っている。理由となる部分を見つけ出す力をつける指導について成果が見られる。ただし、主語が欠落したり、「色」「形」の語が抜けたりしていることも考えられるので、一文として十分な形で答える指導にも配慮したい。
- ・【5】は、主張のために必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる問題であるが、正答率は37.3%で、昨年度を上回っている。しかし、依然として6割を超える児童が不正解であることから、目的に応じて必要な情報を読み取ったり、いくつかの資料を対応させて読んだり、主張と関係付けて材料を選んだりする力に課題が残った。引き続き、各領域で**目的に応じて主張と関係付けて根拠を挙げたり理由づけをしたりする学習**を大切にしていきたい。(相手や目的、場面や状況に応じて、言葉を手がかりに論理的に思考したり想像したりする学習の構想については、指導シートを参照)

2 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては、**つける力を明確にして言語活動を決め出す**ことが求められる。その際に、子どもの興味関心を把握した上で、必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくことを通して、どの児童にも相手や目的、場面や状況に応じた言語能力がつくようにする。
- ・「書くこと」の指導では、**目的に応じ自分の考えが明確になるよう文章の構成を考える学習展開**を工夫する。また、接続語や指示語に着目し、論理の展開を整える学習の充実を図る。
- ・「読むこと」の指導では、**目的や意図に応じて、文書の内容を的確にとらえ、理由や根拠となっている内容、構成の仕方、巧みな叙述などについて注意する力を高める学習**の充実を図る。
- ・「漢字に関する指導」においては、実際に文の中で使われているものを取り上げ、子どもが字を覚えたり使ったりする楽しさを味わえるようにする。また、日々の漢字練習の仕方やテストのやり方については、**家庭学習との関連を図る**などの工夫をする。

【国語】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】，【2】は，文章表現で使う語彙，漢語を中心とした書き言葉に使用する語彙を出題した。使用頻度が低いため正答率が上がらないことが考えられる。抽象的な語や，書き言葉に使用する語，四字熟語などについて，**他の言葉と関係付けたり，実際に使ったりする学習場面**を大切にしたい。
- ・【3】は，一文を二文に分けて表現する問題であるが，正答率は35.4%で，平成22年度全国・学力学習状況調査の類題よりも7.9ポイント下回っている。二文に分ける際に，二つの意味内容の関係を正しくとらえていないことが考えられるので，書くことの学習過程で，必要に応じて随時立ち止まり，ペアやグループ，学級全体で検討したり見直したりしながら，**修正の観点を明確にして書き直していく学習場面**を大切にしたい。
- ・【4】は，歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題であるが，正答率は45.7%で，昨年度よりも下回っている。正答率の分布が大きく広がっており，古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりについての理解が十分図られていないことが考えられる。知識として学習するだけでなく，繰り返し音読することや暗唱，朗読などを通して，語のまとまりに触れながら，**文語文を正しく読む力**を身に付けさせたい。（指導法については，指導シートを参照）
- ・【5】は，取材メモ中の言葉とまとめ部分の言葉とを関連付けながら理由として記述する問題であるが，正答率は26.7%で，昨年度よりも1.1ポイント上回っているものの，依然7割を超える誤答が見られる。目的に応じて，**いくつかの資料を対応させて読んだり，主張と関係付けて材料を選んだりする力や，事実や根拠から理由付ける力に課題がある。根拠を基に自分の考えをまとめ交流し合う学習**を通して，根拠となる事実や資料を関係付けて考えたり，理由を付けて考えを述べたりする学習場面を引き続き大切にしていきたい。

2 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては，**つける力を明確にして言語活動を決め出す**ことが求められる。その際に，生徒の興味関心を把握した上で，**必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定**することを通して，つける力の確実な定着に結び付くように配慮したい。また，見とどけの場面で定着が不十分であると判断した場合は，ポイントを示して考え直したり反復練習したりする機会をつくったり，身に付いたことや疑問として残ったことを言語化させたりするなどして，**確実な定着に結び付くための個に応じた指導**を行うようにしたい。
- ・「話すこと・聞くこと」の指導では，自分の伝えたい意見を述べるのに，**どのような事実を根拠として取り上げるかなどを考えて，話を構成する学習**の充実を図っていく。
- ・「書くこと」の指導では，学習過程を明確にした単元構想を図り，**根拠や事実から理由付けをして自分の考えを書く活動**の充実を図っていく。
- ・「読むこと」の指導では，いくつかの文章を比較するなどして，それぞれの文章の構成や展開，表現の特徴をつかむ学習の充実を図っていく。
- ・漢字の家庭学習については，繰り返し練習だけのものとせず，例えば「四字熟語を集めて短文を作ってみよう」「新出漢字を使った熟語を集めよう」などの投げかけをし，生徒が**目的をもって取り組めるもの**になるようにしたい。

【算数】＜小学校5年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】は、小数＋整数の問題であり、正答率は昨年度 56.9%（一昨年度 65.6%）とほぼ同じで、56.4% になった。引き続き、小数の加法・減法の指導では、小数の意味や仕組みについて数直線を使ったり、**単位を付けて日常生活に結び付けたり、整数の計算に帰着させる**などして理解させることに留意した指導をしたい。（→指導シート参照）
- ・【2】は減法と除法の混合した整数の計算をすることができるかどうかをみる問題であり、平成 22 年度全国学力・学習状況調査において 66.3%であった正答率よりも高く、72.3%であった。**加減や乗除を用いる具体的な場面と式の表現とを結び付けて考える算数的活動**を通して、計算の順序を意識できるようにする指導が行われてきた成果だと考えられる。
- ・【3】は、分数の大小関係についての問題であり、正答率は、昨年度 44.5%（一昨年度 44.7%）、本年度は 53.9%となった。正答率は上がってはいるものの、4割以上が十分理解していないことから、さらに、**1より大きい分数を仮分数として同じ単位分数のいくつ分と表したり、帯分数として整数部分に着目して数直線上に表したりする**などの指導を重ねていく必要がある。
- ・【4】は、平成 20 年度全国学力・学習状況調査の類題として、本年度新たに加えた問題である。割合を求める場合の除法の意味について理解しているかどうかをみる問題であり、正答率は 80.5%であった。今後も、数直線や線分図などに数量を表して、それらの関係を調べる算数的活動を取り入れ、**何倍とは、基準量を 1 とみて、比較量からそれがいくつ分とれるか考えている**ということを理解できるように授業を展開したい。
- ・【5】は、事象を数学的に表現する問題で、正答率は、昨年度 43.0%（一昨年度 34.6%）、本年度は 47.2%であった。これは、図や式を読む学習や、考え方を説明するような学習が地道に行われている成果と考えられる。しかし、依然として5割以上が十分に理解していないことから、さらに、**考え方を図や式に表現したり、表現された図や式から考え方を読み取ったりする双方向の学習を位置付けるとともに、説明し伝え合う算数的活動の充実**を図りたい。

2 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては、個に応じたきめ細やかな指導を行うことが大切である。特に、定着状況が不十分な児童に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補足的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている児童に対しては、発展的な学習に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。
- ・**補足的な学習**では、例えば、複数の考えで計算の仕方を説明することができる「 4×1.5 」のような計算で、1つの考えについて、それを**別の数値の計算で用いてみたり、同じ数値の計算を別の考えで調べたり説明したりする**というような学習が考えられる。
- ・**発展的な学習**では、例えば、「 20×1.5 」のような小数第1位までの計算の仕方を基に、小数第2位がある「 20×1.35 」のようなかけ算の仕方を考え、説明し伝え合うような学習が考えられる。

【数学】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】は、正負の数の四則計算であり、正答率は、昨年度73.7%、本年度76.0%で、安定した力がついてきている。これは、誤りのある計算について、誤答になる理由を考え、正しい計算方法との違いについて検討する場面を仕組むなど、指導の工夫が行われてきた成果だと考えられる。今後も、項を意識しながら計算の順序を確かめて正しい計算ができるように指導したい。
- ・【2】は、比例のグラフをかく問題であり、正答率が平成20より右表のように下がり、本年度は55.3%であった。関数領域では、 $y = -2x - 2$ が、表やグラフにどのように現れているか考えるなど、比例定数に着目し、**表、式、グラフを関連付けながら関数の特徴を見だしていく数学的活動**を位置付けていきたい。
- ・【3】は、全国学力・学習状況調査の類題として本年度新たに加えた、方程式の解の意味についての問題である。正答率は61.2%であり、4割近い生徒が方程式の解の意味を理解していない。方程式の解の意味を理解するために、様々な数を方程式に代入するなどして解を試行錯誤しながら探す数学的活動を位置づけたい。また、方程式を解いて得られた値がその方程式の解であるかどうかを確かめる際に、**方程式の解の意味を確認する**ことが大切である。
- ・【4】は、円錐の体積を求める問題であり、正答率は平成22年度P調査、C調査では、それぞれ30.5%、25.4%、今回の調査では32.9%であった。見取図を正しく選択していなかったり、体積を25と π を付け忘れたり、 75π など底面積×高さで求め、 $1/3$ をかけ忘れたりする誤答が予想される。立体の構成や計量について、具体物を示したり実際に作ったりしながら実感的に学ぶ授業の工夫や、覚えた公式に数値をあてはめて体積を求めるだけでなく、**計算の過程や求めた数値を立体と関連づけてとらえる**などの工夫が必要である。
- ・【5】は、文字式の意味を読み取る問題であり、昨年度の正答率は47.0%であったが、本年度は読み取る式が昨年度と比較して難しいこともあるが、正答率は28.0%となった。問題に提示されている【説明】の例のように、適切に図を囲みながら式の意味を説明できなかつたり、無解答であったりする生徒が多くいたことが予想される。文字式に抵抗を感じる生徒には、まず一辺に5個の基石を並べたときの $4 \times (5 - 2) + 4$ の意味を説明し、その後5を x に変えたときの説明を考えるよう助言するなどの手だてが必要である。また、互いの考えを説明し伝え合う数学的活動を通して、**結論まで正しく書くことの大切さを生徒が実感できる**ような授業を一層進めていく必要がある。

H20	60.1%
H21	58.9%
H22	54.6%
H23	55.3%

2 学習指導に当たって

- ・定着状況が不十分な生徒に対しては、授業の定着場面における**見とどけ**を確実に行うことが大切である。また、繰り返し学習をしたり場面を変えて学習したりするなどの**補充的な学習**が必要である。
- ・基礎・基本を身に付けている生徒に対しては、それをより広げたり深めたり進めたりするなどの**発展的な学習**に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。
- ・こうしたことを踏まえ、生徒一人一人の特性を十分理解し、個々の生徒に応じた指導方法を授業の中で実現していくことが必要である。
- ・補充的な学習では、例えば、数式領域では $25 - 5 \times (-4) = 5$ と計算してしまうのはどのような手続きをしたときか検討し、その手続きの妥当性を語り合った後に、留意することを意識してドリル学習をすることなどが考えられる。
- ・発展的な学習では、例えば、【5】の問題で、基石の並べ方を変えて、そのときの基石の数を式に表し互いの式を読み合う学習も考えられる。

【英語】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

- ・【1】は、現在進行形の理解をみる問題であり、正答率は53.4%である。昨年度の81.6%より約30ポイント下回ったが、前文の内容と直前のbe動詞に着目しないで、helpを三人称単数形や過去形にした生徒が多いことが考えられる。今後、**現在進行形の理解を図る指導**を一層丁寧に行うとともに、**十分な口頭練習と【主語＋動詞】に着目させて書く活動を継続**したい。
- ・【2】は、「主語＋動詞＋目的語」の語順の定着をみる問題であり、正答率は76.1%である。昨年度の64.7%より約10ポイント上回った。日常の授業の中で《主語＋動詞》の語順を意識させ、口頭練習や言語活動が繰り返し行われている成果と考えられる。今後も、生徒に**英語と日本語との《語順》の違いを意識させ、場面や働きを意識した言語活動**の中で定着を図れるような指導を継続したい。
- ・【3】は、簡単な質問を理解し、Yes、Noで適切に答えることができるかどうかをみる問題である。正答率は49.6%であり、昨年度の51.0%と同程度である。Stacyを代名詞のsheにかえることができずにYes, it is. Yes, he is.などと主語を間違えている生徒が多いことが考えられる。教科書教材の本文の内容についての《Yes-No 疑問文》を扱う中で、**疑問文の主語を正確に見付けさせて、応答文では代名詞に置き換える習慣をつける指導**を継続して行いたい。
- ・【4】は、本文の内容について、疑問詞を使った簡単な質問を理解し、適切に答えることができるかどうかをみる問題であり、正答率は22.9%と低い。昨年度の29.6%や一昨年度の25.8%よりも低い。He play tennis.と動詞に三人称単数形の-sを付けていないものが多いと考えられる。また、疑問文の意味が分からなかったり、疑問文の意味や本文のどの部分についての質問なのかがわかかっていても、答え方の理解と定着が不十分であったりすることも原因であると考えられる。今後は、《wh-疑問文》について、**【主語＋動詞】の語順など、文法を意識して正しく書いて答える場面を仕組んだり、主語を確認して動詞を使う習慣が身に付くような指導**を丁寧に行ったりしたい。【指導シート参照】
- ・【5】は、自分自身について2文で紹介文を書く問題である。正答率は45.5%であり、昨年度の69.8%比べて約25ポイント下回った。積極的に書いて表現しているものの文法及び、綴りや大文字・小文字の間違いがあったことや、何を書いてよいのか分からずに無回答であったことが考えられる。今後、**生徒が書きたくなるような場面や話題を設定し、主語を明らかにして書く活動を繰り返し行うとともに、その中で文法の理解や単語の綴りの正確さについて生徒が考えることができるような指導**の工夫を行いたい。

2 学習指導にあたって

- ・P調査や定期テスト等の結果から、生徒の誤答を分析し、その**生徒に合った支援**を工夫したい。また、一度扱った言語材料を授業で言語活動を通して**繰り返し位置付ける**など、既習事項を生徒全員に**確実に定着させる指導**の工夫を図りたい。また、ついた力の**見とどけを確実に**行いたい。
- ・伸びる生徒を伸ばす工夫として、例えば、本文についての英問英問を終えた生徒には、さらに本文と関連した読み物教材を与えるなど、次の活動を用意しておくことが考えられる。
- ・授業で扱った本文の音読や書き取りなど、**生徒が取り組みやすい課題や、自ら表現するような発展的な課題**を与えるなど、**日常の授業と家庭学習をつなげた指導**を一層充実させたい。

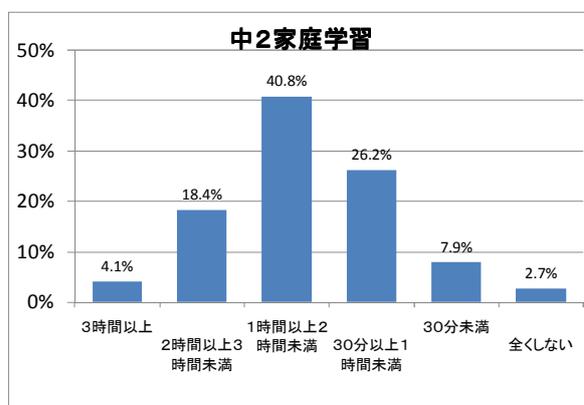
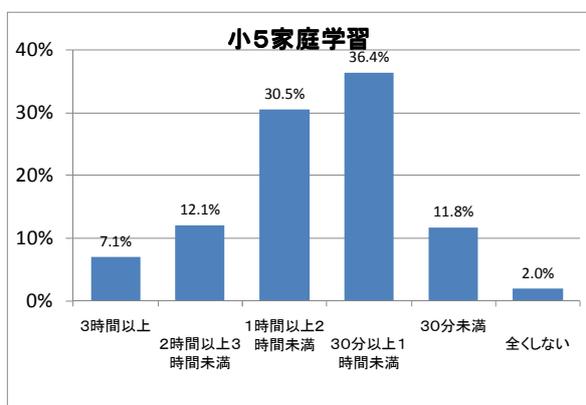
4 家庭学習の時間

◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上, 3時間より少ない |
| 3 1時間以上, 2時間より少ない | 4 30分以上, 1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 まったくしない |

(単位%)

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30分未満	全くしない
小学校5年	7.1	12.1	30.5	36.4	11.8	2.0
中学校2年	4.1	18.4	40.8	26.2	7.9	2.7

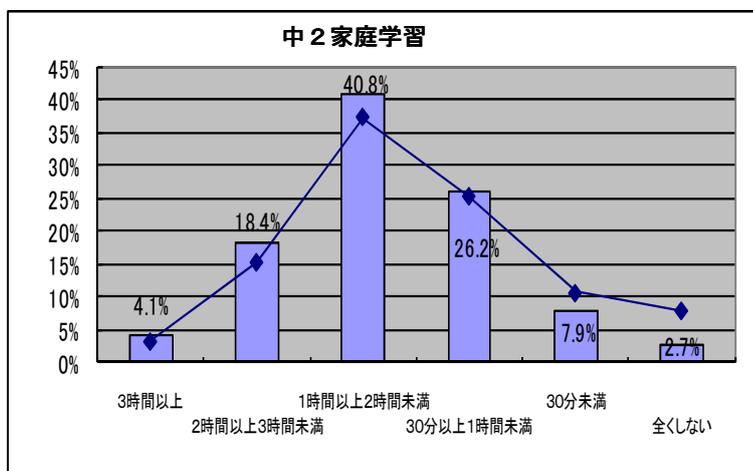


家庭学習時間が1時間未満である児童・生徒の割合が、小学校5年で50%、中学校2年で35%を超えている。昨年度と比べると、小学校はほぼ同様だが、中学校では若干増加している。

小学校5年では、30分～1時間、中学校2年では、1時間～2時間の家庭学習を行っている割合が最も高い。

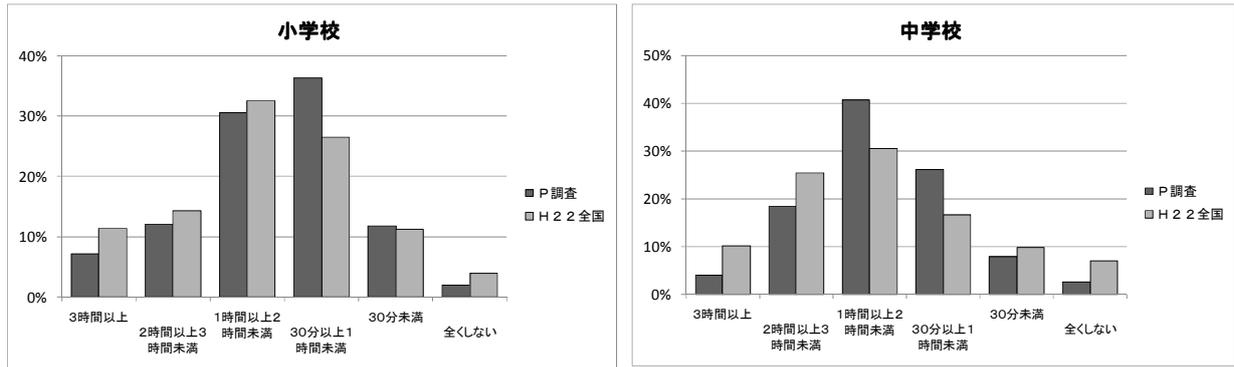
各校では、この分布と自校の分布を比較することにより、課題を見だし、対応策を立てることができる。

<例> 棒グラフが県平均、折れ線グラフが自校の分布



このように、県平均と比較して、30分未満の割合が高い傾向がある学校は、該当する子どもに対して、生活習慣の見返しについて共に考えたり、予習、復習の具体的な方法を助言したりするなど、個に応じた対応策が考えられる。

<平成22年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙結果との比較>



小学校5年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における小学校6年の全国平均のデータと比較すると、家庭学習を「全くしない」の割合が、全国の平均と比べて低い。また、30分以上1時間未満の児童の割合が高く、1時間以上の割合は低い。生活習慣を確立させることで、1時間以上の区分に入る児童の割合を増やしていきたい。

中学校2年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における中学校3年の全国平均データと比較すると、家庭学習時間が30分未満である生徒の割合が全国の平均と比べて少ない。しかし、2時間以上の生徒の割合が低く、苦手な教科の補充学習や、予習復習など、学校からの宿題だけでなく、自分で計画的に家庭学習をしていく習慣を確立させることで、2時間以上の区分に入る生徒の割合を増やしていきたい。